

卒業論文

飛騨の聞き書き

慶應義塾大学法学部政治学科 4年 津谷 瑛里 (30958482)

2012.12.31

# 飛騨の聞き書き

津谷瑛里

はじめに

## 1 子ども時代

- 1-1 「肝試し」
- 1-2 「お蚕さんと虫」
- 1-3 「とつつあまの山仕事」
- 1-4 「兵隊さん送り」
- 1-5 「チューインガム」
- 1-6 「習字の手本」
- 1-7 「藁細工」

## 2 食生活

- 2-1 「食べもののこと」
- 2-2 「ひなたの食事」
- 2-3 「干し柿」
- 2-4 「1日7合」

## 3 仕事

- 3-1 「石工」
- 3-2 「杉崎の水汲み場」
- 3-3 「仕事への誇り」

## 4 家族

- 4-1 「世界中で一番幸せ！」
- 4-2 「初めての高山」
- 4-3 「正月の結婚式」
- 4-4 「初子の喜び」
- 4-5 「時代の変わり様」

おわりに

## はじめに

四季と共に、丁寧に生きる。大学最後の半年間で、その感覚を今日も当たり前前に紡いでいる飛騨古川の暮らしに出会った。日本の北アルプスの山々に囲まれた豊かで厳しい自然環境を生き抜くために、何代にもわたって受け継がれてきた知恵には、四季が作り出す自然と土地の先人たちへの畏敬の念が込められていた。目に見えない存在を感じ、信じながら謙虚で真摯に生きてきた古川の人たちの心の尊さを記録したいという想いから、古川を生きる一人の老人の聞き書きを行なった。彼の人生の記憶に垣間見える、生まれ育った土地と自然への感謝と慈しみの感情が伝わるよう、彼自身の語り口をそのまま書き起こした。

「ともかくも古川の町並みには、みごとなほど、気品と風格がある。」司馬遼太郎が著書『街道をゆく』の中で述べたような美しい町並みは、古川の自然が作り出す険しい山々の四季の中で形成されていった、地元に誇りを持つ人々の感情の積み重ねによるものだろう。土地の気候や自然が人間形成に大きな影響をもたらすのであれば、四季に寄り添った丁寧な暮らしの知恵を書き残すことで、移り変わっていく土地の自然とそこに積み上げられた人々の記憶を文字にとどめる一助になればと思う。

構成は、飛騨古川の藁細工職人の沼田氏から聞き取りを行なったものを、子ども時代、食生活、仕事、家族のカテゴリにわけて編集を行った。

### お話を聞いた人 沼田富男さん

昭和九年一月二十三日生まれ。古川生まれ、古川育ちの藁細工職人。幼少期を戦中戦後の飛騨の地で過ごし、仕事のかたわら五十年以上藁細工を続け、現在は自ら育てた無農薬の米の藁を使って古川の祭りに使われる太鼓のこもや大蛇のモチーフ、神社のしめ縄を手がける。山の中に自ら建てた工房では、沼田さんの指導のもと草履づくりなど藁細工に親しむことができ、岐阜県内外から人が訪れている。

## 1 子ども時代

### 1-1 「肝試し」

あの時分は舗装なんかなくて、みんなガタガタの土の道やったわな。みんなうちの近所の道路やら家の裏やらで遊んどった。夜も夕飯食べてから暗いところでかくれんぼとか、よう遊んだ。春から秋にかけては肝試しやった。あれがおそごうておそごうて（恐ろしくて）。先輩が隠れとって脅かすもんで、おそがかった記憶があるな。うちの前の四つ角が遊び場の拠り所になっとなって、だいたい天神と、踏切の四つ角のところにあった墓様に行っとなった。行くと、墓の前に紙が置いてあって、それを一枚持ってくるのがおそごうて。小便ちびるくらいやわ。びくびくしとった。真っ暗やで。墓どこ（墓場）いくやつは一本道やったけど、天神行くやつは階段登らんならんし、なんてったって森があるで、おそがかった。誰か隠れてるのなんて分かるんやけど、だけど驚かされればびく一っとして。一回、一人の子が出てたら、もう帰ってこんのやさ。先輩がどうして帰ってこんのやって言って、ずっと天神までのコースを行くんやけど、脅かしに待てる者も、ちっとも来んって言うの。もう陣地にも帰ってこんし、天神にもこんし。そして、ひょっとして家でねえのかって言って家行ったら家で寝とったのやな。「どうして天神来なんだなー」って言ったら、逆に親に怒られて。「そんなおそがいおそがいていうのを、なんでお前たちはやらせるのじゃ」って言って怒られて、ほうほうになって逃げてきたことがあった。そんなこともあったけどな。でも事故でなくてよかった。

### 1-2 「お蚕さんと虫」

昔はこのへんはくうどおり（九通り、ほとんど）桑畑やったの。お蚕飼ったもんでな。うちもずっとお蚕飼った。年間で多いときは四回飼ったな。ちいせえ種を専門につくるところがあって、そこで羽化させたのを買ってきて。ちいせえ檻に何千匹も何万匹も入ってるわな。それをうちで育てて、畑から桑とってや桑くれてや、どれくらいになるかな、一ヶ月程かな、繭

をすかく（蚕の体が自然と透明になること）んやな。どんどん桑を食べてな、大きくなるでな、そんで自分で体がいいと思うと、桑を食べなくなるの、自ずと。今度は自分の巣をつくるわけやな、口から糸を出して。自分はお腹の中におって、自分を包んでいってまうわけやさな。一年のいちばんはじめは「はな」って言って少し飼ってな、次が春に飼うもんで春蚕（はるご）、今度は夏に小さい幼虫飼ってきて夏蚕（なつご）、最後は晩秋やわな。まあ「はな」を飼う人は少なかったもんで、ほとんど三回やけど。

それで、繭になったのは古川では組合製糸っていってな、製糸工場に女工が八十人〜百人くらいおったかな、そこに持って行くわけ。それではじめてお金になるんやな。手伝いはもう、したぐらいでねえさ。桑盛りから桑くれから、ずっと子どもの時からそれはもうはや。わしはな、虫が嫌いなんやさ。特に毛虫なんかはもう何を見るよりか嫌なの、今でも。それでもお蚕だけは、子どもの頃から飼ったもんで、ちっともかまなかったつまんだったって怖くなかった。あれは本当に不思議やと思ったな。とてもじゃないけど、ムカデよりかへびよりか、何よりも嫌やな。虫だめなの。

### 1-3 「とつつあまと山」

うちの父親は山仕事ばかりやったわな。木を切ったり、それを車轆きっていうんやけど、製材所に運搬したり。昔はガチクタク車っていってな、ほとんどそういう金車やったんやけど、うちの父親は山で木切ったり運搬したりする仕事やったもんで、ゴムのタイヤのゴム車を持つったの。昔はゴム車持つると人は古川でも少なかったでな、「沼田んとこゴム車あるでええなあ」なんて言われたこともあって、子ども心に嬉しかったよ。それで子どものころはずっと綱引きに行ったの。あの時分は自動車なんかない時代やでな、どんなに遠くても、車轆いていってや、材木積んでや轆いてくる訳やな。その車が重いていって、荷縄を持って綱引きに行くわけ。「今日はどここの山行つとるで、学校からあがってきたら来いよな」って言われとって、とことこと一里も二里も三里も離れたところまで歩いて

いって、どこかで父親たちが車轢いてるところに出くわすわけやな。そこで車に荷縄をくくりつけて引っ張ってくる。俺がいちばんよく行ったし、すぐ下の弟もよく行ったな。

父親は、子どもたくさんおるしな、そうかってみんな食べさせてかんならんでな、今思うと大変やったと思うよ。せやもんで、日曜も土曜も何もないけど、雨が降るとうちの父親はご飯だけ食べに来てや、また寝床はいつてたな。二日でも三日でも、雨が降ったら寝てた。母親が言いなつたけど「富男、とつつあまはとにかく一生懸命働かんならんもんで、雨が降るとそれだけが楽しみで体が休めるんやで、『ちょっと起きて家のことでもやんなよ』なんて言うな」ってな。休みがないからな。山仕事で一日勤めて帰ってくると、タバコ好きやったもんで、玄関に腰かけてまず、きぎみの葉を詰めたタバコを一服すって、それから今度は小便を天秤にかついで、畑においでなさるんやさ。今みたいに肥料なんかないで、わずかだけでも野菜にくれたいんやな、必ず帰ってきたら田んぼや畑に行ったな。「あれにもくれない、菜っ葉にもくれない、豆にもくれない」ってやろ、谷で水くんできてや、薄めてかけてたな。どんどん水で増やしてくれるもんで、ほとんど成分なんかないぐらいやな。それが春から秋までは日課やったな。くたくたにくたびれとっても、夕方帰ってきたら必ずそうやって畑行っとった。わしらは子どもやでな、畑行け、田んぼいけ、草取りにいけ、野菜とってこい、熊手で畑を打っとけとか、言われたことは手伝ったけどな。じゃがいも掘りなんて暑い時やわな、七月の下旬頃、暑いし、畑から下の方見れば夏休みで子どもたちは水遊びに行くし、「富男—！水浴びにいくか—！」なんて鞆ほかりながら言われても、「俺行けんのよ、畑行かんならんで」って、毎日ではないけどそういうことが多かった。父親に言いつけられて、畑行かんならんもんで。それで暑いもんで、ケツすえて芋掘っていると、石を打ち付けられた。「そんな富男！ケツすえて芋なんて掘れるか！」って言ってや、それぐらい厳しい人やった。今思えば厳しかったけど、それだけ大変やったもんで、一生懸命やったんやな。自分が年を重ね

る程、親は偉かったと思うよ。それを思うと、今のわしなんか天国みたいなもんやで。好きなことして、思う程食べてな。

#### 1-4「兵隊さん送り」

まだわしが小学校三から四年時分はな、兵隊さん送りってあった。わしのおじさんも、戦争に行くって行って赤紙で召集令状が来るわけ。それがくるとお国のために兵隊に行かんならんってことで。兵隊さんってかっこいいな一なんて思う時分やさな。兵隊さん送りって行って、みんな国鉄の汽車に乗って岐阜の方に行く。それで教練受けて、戦争最中のときはどんどん外地へ大陸行ったり南方行ったりして、戦死して死なはった人が多かったんやけど。その兵隊さん送りのも、学校で「今日はまた兵隊さん送りがあるんやよ」って言って、先生が引率して線路沿いの道路まで出て、小旗をみんな振って、「がんばってよー！がんばってよー！」って送り出すの。窓から兵隊さん顔出してな。ほんとの身内は、汽車乗って高山過ぎて、飛騨一ノ宮まで送って行かはったんや。今でも飛騨一ノ宮の駅行くと、ぐるっとまわってトンネルに続く。だから最後の飛騨一ノ宮の駅で別れると、長いうち兵隊さんが見えるんやな。長い距離をぐるっと回るもんで、よく見える。今でもそこ通ると、「ああここは一番長いうち列車が見えるところやで、ここまで兵隊さん送りにござった人がおるんやなあ」って思っつてやな。兵隊さんで招集されればもう二度と会えんっていう時代やったで。かわいかった（かわいそう）と思うよ。

#### 1-5「チューインガム」

終戦になって、「今日は特別のお話があるんやで、みんな講堂に寄れ」って言われて行ったら、八月十五日やったけど、天皇陛下の戦争に負けたっていう玉音放送聞いた。わしらもどのくらい悲しんだか悲しまんだか記憶はねえけど、戦争がすんだで兵隊に行かんでもええで、ほっとしたっていう気持ちはなかったな。ただ戦争に負けたらどうなるんやろってことだ

け思ったな。皆殺しになってまうんでないかってデマが飛んでな、それから。アメリカ兵が来て、日本中の女の子はさらっていく、男の子は殺してまうってデマが飛んだ。「アメリカ人が富山まで来たらしいぞ」とか言っ  
て。昭和十六年に戦争始まった頃は日本も勝ち戦やったもんで、帝国の人を捕虜にして働かせる。神岡鉱山にもたくさん捕虜がおったわけやさな。わしの子ども時分はちっともそんなこと知らなんだけど、アメリカ人が神岡鉱山の穴の中入って炭坑掘りしとるんやぞって話には聞いてったの。そしたら敗戦になって、捕虜になった人が意気揚々と名古屋やら東京やらに帰って行く。それが汽車で帰って行くんやけど、みんな学校から見に行っ  
たんやな。そしたら「ひゅーひゅー！」なんて言ってチューインガムを、撒いてくれるんやさな、汽車の窓から。子どもやもんで、「ガム！お前ガム拾った？うまかったなあー！」なんて言って、先生にひどい怒られたな。「帝国の捕虜が撒いたものをなんで日本人が拾うんや！恥ずかしいこと平気でして！」って言われた記憶があるな。勝てば官軍、負ければ賊軍ってな。あの時は子どもやったもんで、どのくらい世間がどうなっ  
ていきよる、どうやって復興していきよるって、あんまり詳しいこと知らずに済んでまったけどな。

### 1-6 「習字の手本」

あの時分は高等科って言って、2年までやった。そしたらわしらが小学校卒業するとき、新生中学って名前になって、そこから三年になったの。高等科なら二年で卒業できたやつを、わしらから三年になったんやな。勉強できる人はよかったけど、わしみみたいに勉強嫌いなもんはな、それが嫌で嫌で。「社会人になって学校行きとらない、また一年なんて行かんならんの」ってそんなこと思っ  
とった。それくらい勉強が嫌やったもんでな。習字の時間になると、当然習字紙なんてないわな。だから新聞紙。でも新聞紙もどこの家庭でもとってなかったでな。新聞紙を分けてもらったのを習字の先生のところに持って行く。「先生に手本書いてもらった！」って言っ



て自慢する子もおってな。わしなんか勉強できなんだで書いてもらえんのかな。一回だけ嬉しかったことは、わしその時分から藁細工好きやったんやけど、工作の時間に藁細工が一年に一ぺんだけあった。その時分からわし上手やったんやな、先生が「沼田、俺に草履つくってよこせ」って言わはって。で作ってやったら喜んで、新聞紙に手本書いてくれたの。それが今思うと、ただ一番小学校時分の嬉しかった気持ちっていうか。

### 1-7「藁細工」

その時分も好きではなかったんやよ。ただずっと親から「自分で履く草履くらい自分でつくれ！」ってはじめは自分の草履のこと言われてて、小学校三年時分くらいになるとはや、「うちのためにみんなつくれ！」って。とつつあまが「とつつあまは山仕事に行かんならんで、俺は俺の草鞋（わらじ）は自分で作って仕事に行くで、そのかわり母親と兄妹六人の分は全部お前つくれ」って言われて、たくさん作らんならんかった。ほとんど間があれば田んぼや畑行って、学校は申し訳程度に行かんならんで、その時分からずっと藁細工させられたもんでな、だからちっとも楽しくなかった。ただ「ああたくさん草履作らんならんなあ」って思ってた。ただそのおかげで今こうやって手に染み付いてな、楽しんどるんやで。今になって初めて「あああの時藁細工させられたで、今こうやって余生を楽しめるんかなあ」って思う。だからみんなあんなこと楽しくなかったで、ほうってまったけど、わしだけは藁の匂いが手に残ってたもんで、未だに楽しんでる。不思議やなあ。古川でも藁細工する人なんかわしだけかもしれん。でもそのおかげで会えた人もいっぱいおるし、不思議な縁やな。

## 2 食生活

### 2-1「戦時中の食事」

大東亜戦争の戦前戦後の一番食料の無い時は、餅ついてもほとんど草やったな、ヨモギ。でも草ばっかついてもパサパサやでな、モチゴメを入れる

とちょっと粘りがあるもので、なんとかつながる。その程度の米しかなかったわけ。だから大方草の餅やった。焼いてもポコンと膨らむことがない。片一方の焼けたところから火がついて燃えてくるくらい。食料のない時代やさ。だいたいヨモギやったけど、ビョウブの葉が毒にならんって言って、それをヨモギ代わりに粉にして米に混ぜたりもした。今でもそうやがそれがうまくなかった。ドングリを拾って粉にして、団子にしたのもうまくなかった。ほんつとに。子どもながらに、何にも食べるものがないから親が作ってくれたで食べるだけで。昭和十七、十八年くらいからやな。大東亜戦争始まった時は勝ち戦で、ハワイの真珠湾攻撃したり、どんだんどんだん勝ってった。そのあとある程度力尽きてからはどんだん追われてくるばっかで。戦争が終わって終戦が二十年、二十四～二十五年くらいは食料事情ってのは悪かったな。白いお米のご飯なんて一回も食べたことなかったでな。家で田んぼやとったけど全部供出でとられてまって。悪賢い人は上手に隠しといて縁の下に蓄えといて、それをちょっとずつ出してや金に変えて、身上（財産）作った人が何人もござる。せやけど、普通の人には政府に買え上げられてまって。もっとも田んぼもお米ができなんだな、肥料もないんやし。今では一反に十俵もとれるっていうけど、あの当時は一反に五俵、今の半分ほどやわな、半分とれるかとれんくらいやった。買うものもなかったし。月に一ぺん肉とか魚食べるなんて、わしらでは考えられんかったな。本当草ばっかやった。主食はお米やで、団子にしたり、大方麦ご飯と豆ご飯やった。粟とか稗とかもあつた。わしは豆ご飯好きやったけどな、その中では。調味料そのものもなかったで、たまりか味噌、酢はあの当時あつたと思うけど、砂糖なんかは配給。町内に配給が来ると、そこでくじをひいて当たるとその人が持っていくんやさな、みんなお金は持ってないで。「配給が来たで、班長さんが取りに行くでー！」って言って、みんなで当たるかな一つてしたもんやさ。こんな魚一匹でも配給やったでな。わしら子どもやけど、親っていうものは大変やったと思うな。子どもは食いたいばっかやし。それでもちゃんと上手に料理したり分けたりして

や、子ども殺さんように、親は六人も七人も育ててくれたんやな。本当今思うと大変やったと思うよ。自分の畑でつくったものは、自分で食べられたで、野菜には不自由はしなんだと思うけど、せやけど野菜も今みたいに豊富に採れなんだ。ほとんどお蚕さんの桑畑やったで、大きい桑の木が立ってて、その下で作るやつやもんで、野菜も今の半分も採れんくらいやった。収穫ってなると木の陰になっと思って日が当たらんもんで、肥料もほとんどなかったもんで、うちの便所から担ってきて、水で薄めてくれる時分やもんで、いい野菜なんか採れるわけないんやさな。わしらの年代くらいまでかな、昭和の戦中戦後の体験しとるのは。

## 2-2 「ひなたの食事」

昔は夏もずっと囲炉裏使ったよ。そこで煮炊きもしたし。ご飯なんか炊くにはかまどって言ってな、裏に勝手口があってそこんどこにお釜を自分で作って。ほとんどの家は自分で作ったんやと思うけど、わしも何度も作ったで。釜土って赤い土を水入れて練ってやな、それでくどって言って釜にかぶせてった。わしなんでもあの時分からもの作るの好きやったんやな。「富、だいぶ釜の土が落ちかけておかしくなったで、どっかでまた作り直しといってくれよ」ってかかさまに言われてな、「そうかそうか、じゃあまた作らんならんな」って言ってや。そこでお釜をかけてご飯なんか炊いたんやな。それで、囲炉裏はひなたって言ったけどな、ご飯は炊かなんだけど、鍋をかけといた。だから結構家の中で火が燃えとったよ。焚き物が必要でな、うちのとつあまが秋になると山仕事して焚き物を根気によせなってな。ただ寒いのがな。ふせぎがあるやろ？ 囲炉裏の周りに木でかこってあるのをふせぎって言うんやけどな、寒いであれにひざかけとると、「行儀が悪いー！」って言ってやな、さぶいもんでやな。ばち一と火鉢で叩かれるんやさ。そういう寒い生活をしとったんやよ。吹雪の時は、障子がちよつとやぶれとってな、そこから寝てる間に雪が部屋に入ってきたこともあったと思うよ。でもそういうところでずっと生活しとるもんでな、冬は寒うて

当たり前や、このぐらい普通やってそういう感覚やったんやな。だからじっと我慢もできたんやろ。今思うとな、ああやっぱな、自分だけやなくて周りもそうやったんやけど、あの時分の子どももな、大人もよう耐えたもんだと思うよ。

### 2-3 「干し柿」

冬の大事なわしらのこまぐち（おやつ）やったんやでな。ほんとに。それも今程改良されとらんもんで、昔はほんつとに昔からあった小さい柿でな、同じ柿でも。そんな柿でも大事にしてな、正月の大事なこまぐちっていうか、かっこいい言葉でいえばお菓子やわな。だから、サツマイモでもそうやったし、たくさん芋つくってな、芋干しって行って干してな、今でも白い粉ふいてるの売ってるわな。ああいうのが大事な大事な冬のおやつでな。柿なんかな、皮むいてほすやろ、でも正月まではな、柿もらって食えんの。親が「それはお正月にならんと食えんのやよ」って言ってな、だからお正月まではむいた皮。皮干しって行ってな、そして皮を食うの。「ああはやく正月こんかなあ柿食いたいで」って言ってや、皮をずっと食わされたよ。少しは甘いのが、皮も。柿の皮やもんで。そんな時代やったんやよ。今思い出すことよ、そういうことは。それくらい物を大事にしたっていうかな。うちに昔からある木を大事にしとったもんで、甘柿もあったけど、うちには「きざわし」って行ってな。甘柿のときざわしって言ったんやな。「さわす」って「そこの柿は甘いかな、きざわしかな」って言ってな。「いやうちは渋柿やよ」って言うとな、「俺んとはきざわしがあるよ」って、甘柿のことやな。「さわす、ざわし」って言葉は、渋柿を焼酎かけて一晩袋に入れとくと甘柿になるって今でもそういうこと言うんや。そういう表現を「これ渋柿やったけど、さわいたもんで甘くなったよ」って言うんや。甘くするって意味。そんで家には、一本だけそういう木があったの。同じ枝でも甘い柿と渋柿がとなりあってなるのがあったんやさ。不思議やったんやさ。せやもんで、よう見て「これ鳥がかじるとで、きざわしかも分か

らんよ」って言って、少しかじってや、「あ、ちょっと甘い」とか喜んで食べたもんや。

## 2-4 「一日七合」

わしらの若い頃はな、飯場（はんば）生活って言って、共同で炊事する人頼む現場の仕事をちょっとしたことがあるんやさ。その時に、まかないしてくれるおばあちゃんみたいな人やったけど、その人言わはったの。「五人おれば五人×七合で三升ちょっと一日にご飯たくんやよ。もうあんたたちは若いんやし、働き盛りやでな、このぐらい食べても当然やよ」って言ってな、そういう話を聞いてとったもんで「ああそんな食べるもんかな」って思っと思ったの。そのかわりおかずって言ったってな、たまには肉やら魚やら食べなって言って一ヶ月に一回か二回はあるけどな、もうほんつとに粗食でな。おかずが。だからごはんだけでや、腹ふくらかしたって言ってな。そういう時代も過ごしたもんでな。すごいな、七合っていうと。うちではそんだけ食べなんだと思うけど、そんでもうちでもわしら子ども自分は五人も六人もいたもんでな、母親そういうこと言ったことはないけど、大きいお釜の坪釜って言ってな、二升分炊くのを使っと思ったな。男ばっかやったしな。あの時分今よりまだ田んぼあったでな。今の家のとこも隣も向かいもみんな田んぼやったし、あんな大きい道路なんてなかったし。せやもんであの辺みんな田んぼやったもんで、十分うちではあったんやさ、米は。米には困とらなんだ。おかげさんでな、そう大きい百姓ではなかったけど、先祖からせやって田んぼつくらはったもんでな、畑もあったもんでな。お蚕さん飼っと思ったもんで桑畑も多かったけど野菜もよう作ってたでな。食べることには幸せやったんやで、百姓は。そんでも、戦前のあの時分はそやなあ、わしらも米供出したんやな。したっていうかさせられたんやな。強制的に。田んぼいくらつくるっとな、いくら米出せっていう時代やったんやな。政府で買い上げやわな。で、量も採れなんだな、今みたいに。今の半分くらいしかとれなんだと思うよ。表現では一畝に一

俵やで一反あれば十俵やなんていうけど、なかなか平均しては十俵とるひとなんてそうはおらなんだもんな。現在でもわしらもよくて九俵くらいしかとらんもんな。あの時分は五俵か五俵半ぐらいしか一反で採れなんだと思うけどな。それでもうちで食べるくらいはな、まあほんつとに戦前戦後の直後の時は大変やったけど、食生活はおかげさんで。

### 3 仕事

#### 3-1 「石工」

卒業してからは、みんなと現場で土掘ったり石かついだりして工務店で使ってもらってた。それから、こんだけ土かまっとっても石かまっとっても、職人の立場になって、百円の仕事でも百二十円もらう、千円なら千二百円もらう、そういうことが大事かなと思ってな、石屋さんの師匠のどこ入って習いかけたの。弟子奉公って行って、三年やな、空奉公で頼んで習いにいくもんやもんで、お金の報酬はないんやさな。小遣いでちょっとくれるだけ。はじめは石割りの方が專業やったんや。谷川行くとな、この部屋より大きいくらいの中から小さいのまで、色んな石があるわな。そういうのを割って、間知石（けんちいし：石垣等に使う土木資材の石のこと）って堤防にあるようなブロックの形のものにして石垣に積んでいく。それと玉石って行って丸い石。そういうので道路やら堤防やらつくっていったんやけど、工事現場で。わしは石を割る方を習ってて、だから石割りばっかやったな。それで徹底して三年間師匠についた。それから工事現場なんか入って、当然あの時分は発破作業もあったんやけど、大きい石にしても、自分の手でコンコンと叩いて、根気にしめていくとじわーっと割れが入るんやさな。大きい石なんかにかかると、十日でも二十日でも食べて行けるくらい、何百も採れたの。楽しかったよ。それから今度は積む方を、「積みまい職人」って言うんやけど、習った。それは三年とは言わなんだけど、現場でや職人に徹底して根っこについて習ったな。「沼田、お前覚えとけよ、お前なら絶対覚えてできるようになるで」って石屋さんがええ人でな。わ

しをずっと根っこにおいて教えてくれはったの。それで積みまいも割りまいもできた。最終的には割りまいって割る石の仕事はなくなったでな、どんどんブロックがでてきたもんで。だから今度は積む方。だから石は好きで好きで今でも好きなの。だからこの辺も何でも石使ってるろ。とにかく石を積むことと並べることが好きなの、今だに。大きい石でも、家の前にあるのも自分でやったんやな。とにかく石をかまうことが好きで好きでな。あ。なんでだろう。

### 3-2 「杉崎の水汲み場」

水汲み場もやったな。うちの会社の社長が「とにかくお前にまかせるで、お前の好きなようにどういう形でもええで、整備してくれ」って言って、あれもわしの一生の思い出の仕事場やったと思う。もともとあそこは水があって、ちょっとした滝もあって、そういうのも全部うちの社長とか、杉崎（水汲み場がある場所の地名）の土地の人から聞いて、全部楽しんでやったの。とっても楽しかった。藁細工と一緒に、やっぱし「ここんこのここはこういう積み方した方が面白いかな」とか、「ここには大きい石積んでやった方が面白いかな」とか、みんな自分の思うようにして景観を作っていけるもんで。生き甲斐があったよ。秋時分から始めて次の年の夏くらいまでかな、完成まではざっと一年かかったな。せやけどうちの社長が、「どんだけかかろうと、沼田、お前の思うようにすりゃええよ、俺はお前に任せてまっとなるで、いつまでにやるでなしに、できた時が完成やで」って本当に見込んでくれてな、そういう仕事さしてもらった。給料はちゃんともらえるんやし、本当にありがたかった。できた時は部落の人や近所の人たちが「すばらしいのできたな」って言ってくれて、嬉しかった。

### 3-3 「仕事への誇り」

藁細工も、人には負けまい、きれいに作りたいって思ってがんばってるけどな。だから石でもそうやけど、「これ誰が並べたんや、へえ田近（務め

ていた工務店の名前)の沼田か、やっぱ沼田やったか、やっぱなあ」って言われるように、本当に仕事には一生懸命やったよ。残るんやしな、そういうのは。「やっぱ沼田やったか」って、そういう言葉が出るのが嬉しくてなあ。楽しかったなあ。仕事に打ち込んでたっていうか、やっぱ楽しかったんやなあ。その代わり時間は全然なかった。朝四時には水汲みの不動さんのところへ行っとな。晩も暗くなってもできるんやけど、いくらなんでも帰ってこんと、また明日の朝も四時に起きて来んならんでっていつて、帰ってきたけどな。ちっとも時間が気にならん。仕事が面白うて面白うて。現場も普通通りに行ったんやさ。せやもんで、七時には会社帰って、会社から現場の人と一緒に石積んだりして、そして十七時まで。で「あい今日もごろうさまー」ってみんな車で帰るんやけど、そこでわしは不動様行って。朝こんだけと、夜現場から帰ってきてこんだけほどと、ってほとんどそればっかやったもんな。丸々行った日もぎょうさんあるけど、大半はそうやって朝と晩行っとな。ずっと石かまっとな。好きなってことは、どんなに体が大変でくたびれても、負担にならん。嫌や嫌やと思うと負担になるけど、好きやなと思うとどんなに大変な仕事でも、大変でねえんやな。なんでも一日一日を満足に過ごすってことは、人から見たらどうか知らんけど、自分では楽しんで勤めたり日を過ごすってことはものすごい幸せやよ。

## 4 結婚、家族

### 4-1 「世界中で一番幸せ！」

二十六で結婚した。二十一で孝子さんが来たでな。甘い話か甘くないのかわからんな、何も知らんうちに結婚したでな。孝子の畑と俺んこの畑が隣同士やったの。それでお母さん同士がふたりで話してたのがきっかけやな。「富男、隣の畑の米村さんってとこに娘さんがおるんやで」なんて言っとな、ははは。米村さんのお父さんも孝子の兄貴も、仕事と一緒にあったことがあったもんで、そういう人は知っとなけど娘は知らなんだの。



嬉しかったなあ、結婚した時は。「ええーこんな人と一緒に暮らしてご飯食べて、一緒に寝れるのー！」なんて言ってな。世界中で一番幸せやな、と思ったよ。本当にそう。日本中でねえ、世界中で一番かわいい子もらったと思ったよ。

六月頃、畑で母親同士がそういう話をしてな、ちらっとかかさまがわしに話してくれてな。向こうの米村のお母さんも、うちに帰って「今日なあ、沼田のお母さんと畑で一緒になってな、こんな話しよったんやよ」って、向こうでも同じような話しよったんやな。昔はお盆がこの辺は九月やったで、一日二日休みがあったんやさな。その盆に、古川の小学校のグラウンドで地元だけの草野球があって。それが何よりの楽しみで、お盆休みに見に行くわけやさ。そしたら米村のお父さんも見に行っって、仕事の関係でちょっと知っったもんで、帰る時に、ちらっと「沼田さん、来たでな」って。それだけ。「わし、帰るでな」って言われて、わしピンとこなんだ。「なんじゃあの人、来たでなってなんやろな？」と思った、その時は。それから、来たでなってことは、娘が工場からお盆休みで帰ってきたで、って意味ってことが分かったわけやさな。向こうのお父さんは本当にさっぱりした人で、余分なことはしゃべらない、すばらしいお父さんやった。それが、その一言だけやったの。それで家帰って、かかさまに「米村の父ちゃんに会ったら、来たでなって言われたんやけど、どう思う？俺はこういうこと思うんやけどなあ」なんて言ったら、「富男、やっぱ、そうかも分からんで。盆やで、娘が来たって意味でねえか」って言ってな。まあ嬉して嬉して。米村の家は知っったけど行ったことなく、畑で採れたスイカ一つぶらさげて、「こんばんはー米村さーん」って嬉しい気持ちで入って行ったんや。それで上がらしてもらって、なんとなしに世間話して。そしたらお母さんが陰におって、「お客さんが来たで、お茶持って行け」って孝子に日本茶出させたんやな。それが初対面やった。そのときは言葉交わさなんだ、お茶出したらすぐ引っ込んでまったで。せやけど、せっかくスイカぶらさげて来たんやで、自分から切り出さな、

って思って、「ちょっとお母さんが話しはったかどうか知らんけど、米村さん、そこの娘さんがござるって聞いとるんやけど、ちょっと一回話さしてもらっていいかな」って言ってな。あんだけの度胸があったんやな、嬉して嬉してしゃあないもんで、度胸ださなと思ったんやな、自分で。そしたら米村さんが「まあ本人が出かけるって言えば行ってもいいよ」って、お父さんも本当にすばらしい人でな、そう言ってくれたんや。それで適当に家出て、ちょうどお盆やもんで盆踊りがあるで今から行こうって言ってつらってつた（一緒にいった）。嬉しかったよ。でも並んでは歩かなんだよ。孝子は後ろからついてくるの。ご飯も食べなんだ。盆踊り見とってな、九時くらいやったかな、「もう帰ろうか」って言ったら「はい」って言って。他には何にもしゃべらなんだけど。それで「米村さん、ちょっと家寄って行くか」って言ったら、素直に「はい」ってそう言ったんや。それで自分の家つらってきたんやさ。そしたらうちのかかさまだけおるやでな、「かかさま、行ってきたー。ちょっと米村さんが寄ってくれるって言ったで、つらってきたよー」って言って、母親に初対面で見せたわけ。それでうちにもスイカとってきてあったで、一緒に囲炉裏で食べて。そしたら案外、遠慮なしにバクバクと食ったんやさ。怖そうな顔もしずに、素直すぎるくらいやな。飾り気のない子やなーと思ったけど。それがまた好感が持てたんやなあ。

#### 4-2 「始めての高山」

せやもんで、また家まで送って行ってやな、「さよなら」って言った後、「もう一回話しをしたいんやけど、出れるかな」って言ったら、家入って親に相談して、「親に話したらいいって言うで」って言われたもんで、「じゃあ明日迎えにくるで、一緒に高山へ出かけよう」って言ったんや。それで国鉄で高山へ出かけて行ったんや。わしらは飲み屋行ったり、食べ物屋入ったりなんて若い頃からあんまりしなんだもんで、ちっともそういうの自分で見当がつかんのやな。どういうところでどうやって時間をつぶしていいの

やら、タイミングを知らんもんで、でもとにかく活動観に行けって思って。今でいう映画やわな、昔は活動って言ったけどな。ああいうところは一番時間取るにええかなと思って。どんな映画かかっとなるか分からんのやさな、何でもいいんやさ、要は。ははは。要はふたりでつらって入れればいいんやで。それで観とるんやけど、映画なんてちっとも目に入らんの。ただ隣が気になって気になって。ははは。分かる？まあ純粹だったっていうか。そしていい加減なところで、「あんまり面白くない映画やなあ、出るか」って言って外出て。今度は食堂入ったんや。でも食堂なんかも一度も入ったことないけど、度胸出してスズメ食堂ってとこやったな、そこ入って。なんか注文するんやけど、その物が分からんの。入ったこと無いもんで。どういもの食べればええんやら、どうい名前料理があるんやら。確かそのとき孝子がチャーハンって言葉を出したんやな。んじゃそれを頼もうって言って、出てきたらなーんか色のついたようなご飯でな。ははは。それ食べたんやけど。腹ふくれたんだかふくれなんだか知らんけどな。ははは。それから今度は城山って行ってな、高山のちょっとした小高い山の公園上がったんやさ。公園上がってぶらぶらと歩いて、それでそん時やったな、一緒にベンチに腰掛けとったら、「返事しようか」って言葉が一番始めやったな。向こうが言ったの。「結婚するで、返事しようか」とは言わなんだけど、ただ「返事しようか」って言葉が出たの。ていうことは結婚をするって意味の言葉やったんやな。「米村さんええの？」って言ったら、「返事をさしてもらいます」って。でもう、それ聞いたらもうはよう家帰りたくて帰りたくて、とにかくもうはや、「じゃあ早う家帰りましよう」って言ってすぐ、はやその返事聞いただけで。そして帰りはバスやったな。あの時分は足がバスか国鉄くらいしかなかったもんで。

#### 4-3 「正月の結婚式」

そうしてすぐ家へ飛んで入って、「かかさま！返事もらってきたよー！」なんて言ってな、何はともあれ母親に相談したいと思ってなあ。まあ、そ

れだけの単純な話なんやけど。手も握っとらんが、それでもう次の日にはや、工場帰ったんやで。飛騨一ノ宮のな。せやけど一応約束したやつやもんで、本人がおらんところで、樽入れって約束だけ向こうの家庭行って、形だけは仲人さんにつらってってもらって、酒持って行って、約束の酒だけ飲ましてもらって。それが九月二日やったで、返事もらったのが。それから一週間ほどたってから約束のお酒持って行って、その時は本人はおらんでな。それからわしらは文のやりとりなんかちつともしななだけど、お互いに行きもせんし。今度はお正月に帰ってくるんやさな。たいてい盆と正月だけは帰ってきたでな、工場行っても。うちがちょうど町内の班長しとったんやけど、新年会で班の人が二十人ほど寄って朝から宴会して、うちも広げてまってな、狭い家やで戸もはずしてまって、新年会しとった。一日の元日の日やった。そして晩方の七時ごろやったかな、「ああ沼田いっぱい飲んだーあんたの家はよかったなあー広かったしみんなでこうやって楽しかったなあ」なんててんでんばらばらと帰って行くんやさ。そしてかかさまと「ああこれでみんな帰ってまったなあ、楽になったなあ」って言ってな、おったら、「こんばんはー」って言ってお母さんと孝子が入ってきたわけ。それでお母さんが「正月やで今工場から帰ってきとるんや、実はちょっと相談に来たんやさ」って言うの。「娘の孝子が正月開けたらまた工場行かんなんのやと。正月に帰つとるうちに、式だけ挙げときゃいいと思う」ってそういうこと言ったんやで。まあなんか行き当たりっていか、でも向こうから切り出したんやで。「また工場へ行くもんで、式だけはあげてから向こうへやりたいんや」って言わはったもんで。まあ願っても叶ってもないことやさ、こっちからしたら。今なら一ヶ月も半年も前から結婚式って言ったらあれやこれや準備してるけど、あんときははや一日に話に来て、四日にもう式あげたんやで。まあ手も握らんが、キスもしんが、ふたりだけでちゃんと話したこともなかったが、そんな早い結婚式やったんやよ。新鮮やったよ。ねえ。会って四回目で結婚式やわな。それでもう次の日は工場行ったんやで。そしてまた六月まで来なんだで。か

わいそうやったなあ。式の次の日行ってまって、また長いうち来なんだで。不思議なんやさ。うん。今は結婚式っていうとふたりでひな壇に座ってみなさんに祝福されるけど、あの当時の結婚式は、嫁さんはちゃんと席に座っとるんやさ。でも男はちっともそこに一緒におらんの。男は勝手場においてや、ずっと料理を出すやつ手伝ったり、式場にはおらんのやで。杯だけはするよ、結婚式やで。あとは宴会になると男はもう関係なし。もらう方の沼田家でやったで、お客さんもうちの親戚だけで、米村家で三～四人と、うちの方で四～五人と、そんだけだけ。嬉しかったなあ。まあそういう気持ちがあるもんで、こうやって五十年経ってもおれるんやな。

わしもいつも思うことは、俺は本当になんで孝子とにらめっこしんならんのやって思うことがあるんやさ、人生にはな。四日も五日もお互いに話したくない時もあるし、でもやっぱしそのときに思うのは、その嬉しかったことやな。わしは世界一素晴らしい、幸せな人間だと思ったなつてのを思い出すんやさ。あんなうれしい気持ちでおれたんやで、今こんなんして嫌や嫌やと思ってわがまま言うのは、もったいないと思う。それを糧にしてがんばっとるの。うん。

本当に純粋な気持ちでおれたなあと思って。そんでも来てくれたでな。これが来てくれにゃあ、やっぱりひとりで過ごさんならんでな。あの時返事してくれたおかげで、子どもも備わったし、沼田家が続いていくんやでな。そう思うと感謝しんならんと思うのやよ。

#### 4-4 「初子の喜び」

あの当時は産婆さんがござる時分やったもんで、古川にも四人か五人おったな。みんな家で取り上げてもらったんやで。あの当時はお腹でこうなったら産婆さんに頼んでお世話になるわけやさ。産む前二～三ヶ月前から月にいっぺんほどござるわけ。「沼田さん、大丈夫順調に育っとるよ」なんて腹なでてくれてな。いよいよ産む時期になると予定が分かるし、そのときは「腹が痛うなりかけたらすぐ連絡すんやよ一来るでな一」って言って、

家来てもらって産むんやけど。ちょうどちの初子の時、やっぱ産婆さんは分かるんやな、ずっと順調やったけど逆子になったってな。どうもこう、なでてみるに、反対になつとるような気がするって産婆さんが。わしも大丈夫やと思ったけど、万が一のことがあると怖いし、初子やで。「沼田さんどうする？産婦人科かかるかい？」って言われて、「ああもうあんたまかせやけど、あんたそうせえって言うなら早速お医者さんに頼むわ」って言って、古川の河合医院に産婦人科があったからあそこへ急やけど頼む一って行ったの。そしたらすぐ裏の病室に入れさせてもらった。そこで産まれたら、ほんとに逆子で、ちょうどよかったと思うんやけど。わしは家におったな。今は子ども産まれるっていうと旦那さんもおってカメラ向かす（向ける）なんて当たり前っていうんやけど。どうやって産まれてくんや一なんて言って。わしら時分は当然そんなことあるわけもないで。家におったら、誰が知らしてくれたかな、「おーい！富男ちゃん！子ども産まれたよー！」なんて言ってな、外から知らしてくれたの。それで家でばんざいした覚えがあるの。ばんざーい！って言って、男の子か女の子か分からんで、「どっちやったのー！」って「男の子やよー！」って言われてばんざーい！って。隣近所の見境もなしに、そんな記憶がある。嬉して嬉して。「えー！俺の子どもができたのー！」なんて言ってな。

#### 4-5「時代の変わり様」

まあ、今からもこれからの時代でどんだけ変わるか分からんけど、どんどん変わっていくのには間違いないけど、わしらの生まれた時から昭和ひとけたやわな、大東亜戦争ってあって、戦争に負けて、そしてアメリカの占領下に入って、そしてまた努力してこんな幸せになってな。こんだけの変わり様ってもんはわしらの時代が一番すごかったと思うよ。これからの時代どう変わっていくか分からんけど、月の世界に新婚旅行に行くんやって時代になつとると思うけど。これはあくまでも科学的な進歩でな、こういうことはどんだけでも進んでいくと思うけど、こういう生活やら環境が変

わっていくってことはわしらほどはないと思うよ。どう思う？今はこういう科学的なことが進みすぎてまってな、わしらみたいな年代では、もう今ははやついていけんくらいやな。もうはやいはやい。こんな携帯だって買っても、もう来年か再来年になるとな、また新しいのが出てくるでな。そうかって変えなきやつついていけんのやな。惜しいと思いつつもやっぱ時代についていくには変えてかんならんのやな。恐ろしいな。逆にいえば恐ろしいと思うよ。

### おわりに

知識として知っていた戦中戦後の暮らしや、田畑と共にあった日本の風景。実際に経験した人から聞く言葉の迫力に圧倒される聞き書きの作業であった。四季の恵みを頂きながら、人の力では管理することのできない自然の営みと共存していく彼らの暮らしの根底には、厳しい自然環境を前にしてひたむきに知恵を紡いできた先人達の努力の精神が流れている。八十年近い時間を生まれ育った飛騨古川の地で過ごしてきた沼田氏の記憶の積み重ねに時折表れる「有り難い」と思う気持ちは、土地、自然、先人達をひっくり返して目に見えない大きな存在によって「自分が生かされている」ことへの感謝の気持ちなのではないか。戦中戦後の時代を生きてきた彼が語る「恐ろしい」ほど猛スピードで移り変わっていく現代の暮らしを生きると、時代を埋めてきた人々の感情まで次々と振り落とされていくようである。彼らの言葉を書き起こし、記録していく過程で生まれる新たな感情の吹き込みが、里山の回りを取り囲むコミュニティのあり方を考え直す一助になればと思う。